

## 庭野平和財団 第五回GNHシンポジウム

庭野平和財団は、平成24年10月19日、第五回GNH（国民総幸福量）シンポジウムを東京・中野の中野サンプラザで開催しました。以下に、基調講演とシンポジウムの内容を要約させていただきました。

基調講演 日本 の “むら” から未来を想像する——私たちの “生きる場” づくり——

内山 節（哲学者・立教大学大学院教授）

### 1 はじめに

私は、生まれは東京・世田谷区ですが、子どものころから魚釣りが好きで、20歳を過ぎたころ、たまたま群馬県の上野村へ釣りに出かけました。その上野村とよほど相性がよかったのか、村のいろいろなことが気に入ってしまい、できれば、この村で暮らしたいと思いました。

その後、古い民家を譲り受けて移住し、上野村の村民という生活を40年ぐらい続けています。200坪ほどの畑と1ヘクタールほどの裏山を持っていて、野菜を作ったり、林業の真似事をしたりしていますが、村人たちとのお付き合いも好きで、上野村の地域づくりといった活動にも関わっています。

### 2 上野村で学んだ日本人の社会観

上野村では、いろいろなことを教わってきましたが、その中で最も大きなことの一つは、日本人の社会観についてです。欧米の社会観は、社会の構成メンバーが基本的に生きている人間だけで成り立っています。ところが、日本の社会は自然と人間によって構成されており、自然も社会の構成メンバーの一員である、という社会観を日本人は伝統的に育んできたと思います。

というのは、村の生活には自然に支えられて成り立っている部分がたくさんあるからです。もちろん、自然は、ときに猛威を振りますから、人間の生活を支えてくれるどころか破壊するということもありますが、その破壊をとおして、さらに豊かなものが創造されるという一面もあります。

たとえば、冬になると山火事が起きますが、その山火事によって山の自然が再生産されるという一面があります。山火事のほとんどは局所的なものです。その生態系が攪乱されることによって、それまで生息できなかった生き物がよみがえってくるという一面があるわけです。ですから、たとえば山菜などに

とって素晴らしい場所が形成されるということもあります。

東日本大震災で被害を受けた三陸海岸などでも、地元の漁師さんたちの話を聞くと、津波のあとの3ヶ月間ぐらいは海から生き物のにおいが消えたといいます。魚はもちろん、砂を掘っても貝もない。岩場を歩いている舟虫さえいなくなって、死の海のようになった。ところが、3か月を過ぎたころから、すごい勢いで海がよみがえってきて、今では、以前の海よりずっと豊かな海になったということです。

三陸地方には、昔から「津波のあとには、海は素晴らしくよくなる」という言い伝えがあるそうです。三陸の海はとてもきれいですが、長い間には海底に生物や微生物の死骸が堆積します。それをいっぺん掃除したほうがいいのですが、人間の力では海底の掃除などできませんし、台風が来ても海面部分が攪拌されるだけで、海の底まで洗われない。その役割を、100年にいっぺんぐらい、やってくる津波が果たしていたと言えるわけです。

ですから、確かに、自然は、一方では、とんでもない猛威を振るうのですが、それもまた自然の動きの一部であって、他方では、その猛威によって、よりよい自然が回復されていくという側面ももっているわけです。

災害の違いはあっても、上野村でも同じで、要は、自然はときどき人間にとって困ったこともするけれども、それによって人間たちの暮らしを支えてきた。そういう意味でも、自然は社会の一部であって、日本の社会を成り立たせている基盤のひとつであることがわかります。

その自然のほかに、実は、日本の伝統社会には、もう一つ、構成メンバーがいます。それは、一言で言うと「死者」ですが、私の実感から言うと「亡くなった先輩たち」と言ったほうが適切かもしれません。

多くの日本人は、「人が亡くなったあと、魂はあると思いますか？」と聞かれれば、おそらく、大多数の人は、「ひょっとしたら、あるかもしれないけど、見たことはないし、ないんじゃないですか」といった曖昧な受け答えをします。あるとは断言できない、というわけです。

ところが、多くの日本人は、その言葉とは違った行動をしています。たとえば、私もそうですが、上野村にいるとき、朝、起きて、最初に何をするかというと、まず自分が飲みたいから、お茶をいれるのですが、自分が飲む前に必ず仏壇に上げるんですね。それから、人に何かをもらったり、いいものを手に入れたりしたときも、とりあえず仏壇にお供えする。それが食べ物の場合は、食べる前に「もらうよ」なんて、一言、声をかけてから、いただく。こういうことは、日本では昔から当たり前のように行われていたわけです。

しかし、日本人が本当に「魂はない」と思っているのであれば、それは誠に意味のないことをしているわけで、お茶を上げようが、お菓子を上げようが、

だれも有り難がらないはずなのに、日本人はそういうことをやってきた。すると、それは、魂があるとか、ないとかいった次元の問題ではなく、死者と自分との関係の問題ではないか、と私は思うわけです。お墓参りなどにも同じことが言えると思います。

つまり、私たちは、死者の魂はあるか、ないか、それはわからないけど、少なくとも死者たちとの関係は断ち切りたくない、といった思いをもって生きていると言えるのではないのでしょうか。死者たちが私たちと結び合いながら、なんとなく同じ世界に存在している、といった感覚で私たちは生きている、あるいは、そういう生き方を大事にしていると言ったほうがいいかもしれません。

上野村では、お盆になると、迎え火は各家々でやりますが、送り火のときは村の人たちが一箇所に集まって、村のご先祖さまたちを見送っています。形としては京都の大文字焼を小さくしたようなものです。このように、日本の伝統的社会では、人間だけでなく、また、自然と人間だけでもなく、自然と人間と、もう一つ、亡くなった先輩たちが依然として私たちと同じ世界に生きていて、私たち日本人は、そういう関係こそを大事にしてきたと思うのです。

### 3 村の先輩としてのご先祖さま

上野村には 1300 年ぐらい前の墓があります。ということは、少なくとも村として 1000 年の歴史をもっているわけです。ですから、私の畑にしても、1000 年の間、誰かが耕し続けてきたはずで、それを、あるとき私が譲り受けて、今、耕しているわけです。そういう蓄積があるからこそ畑で作物が取れるので、すると私としては、畑を耕し続けてくれた先人、先輩たちを意識せざるを得ないわけです。

村の生活をしていると、そのように、すべてのことにおいて村の先輩たちを意識しないではいられません。山を見ても、畑を見ても、道路を見ても、先輩たちがつくってくれた蓄積の上に、今、私たちは生きているのだということが実感として感じられます。その先輩たちを、村では、村のご先祖さまとして大切にしているわけです。

ちなみに、ご先祖さまという言葉は、江戸時代までは、基本的には、地域のご先祖さま、村のご先祖さまでした。ただ、江戸時代になって檀家制度ができたため、わが家のご先祖さまという意識が生まれてくるのです。それでも、わが家のご先祖さまが地域のご先祖さまの一員になったという感覚で、ご先祖さまという言葉を使ってきたのです。ご先祖さまが、わが家だけのご先祖さまを指すようになったのは、明治時代に家制度ができてから後のことです。

#### 4 上野村の新しい共同体づくり

上野村では、そういう伝統的な社会観を今も大事にしていますが、その一方では、やはり、新しい共同体をつくり直すという作業もせざるを得ない状況にあります。

上野村の住民は、現在、1400人弱ぐらいだと思いますが、そのうち210人は都市からの移住者です。村の人口の約15パーセントにあたります。その割合は今後も増え続けて、最終的には村の人口の半数ほどが都市からの移住者になるのではないかと考えています。そこで、村としては、いろいろな人が入ってきたくなるような村づくりを絶えずしていこうとしています。

ただ、移住してくる人たちも、上手に入ってきてくれないと、双方が不幸になるという問題があります。移住に際して役場が窓口をつくるとか、村の誰かがサポートするとか、そういうことをきちんとやっていかないと、来る人も大変だし、入られたほうも大変になります。

これは、冠婚葬祭をはじめとする生活習慣が集落ごとに違うからです。また、村には必ず青年団とか消防団がありますが、その二つに入ることは絶対条件です。これは、コミュニティの基本だからです、

村としては、村営住宅をつくって移住者に入ってきてもらい、集落維持をにかけています。家族で入ってくる方が住むとすると、3LDKぐらいの一軒家で家賃が1万2000円ぐらいなので、非常に安く入ることができます。

それから、3年間限定ですが、月収が15万円に満たない場合、最大5万円まで補助するという、一種の所得補償政策をとっています。したがって、とりあえず村に来れば、3年間は生活が保障されます。

ちなみに、インターネットも今の時代には必要不可欠ですから、すべての家が光ファイバーでつながっていて、プロバイダー料金とインターネット通信が無制限で500円、それにテレビと村内電話料金が合わせて月500円、計1000円で、すべてがまかなわれるようになっています。子育て支援のための託児所、保育所、手当なども整備されています。

また、移住はできないけれども、上野村を自分の村のように思ってくれる人を大切にしよう、という態勢も整っています。これは、ある特殊な能力や資格を持っていて、上野村に協力してくれる方、たとえば専門医のような方を大切にしようということです。また、上野村の主要産業の一つに工芸関係の仕事がありますが、その販売先を探してくれる人や、デザインに協力してくれる人なども村にとっては大切な人的資源となります。

そういう方々は、必ずしも村に定住していただく必要はなく、どこに住んでいてもかまわないのですが、村のほうで相談に乗ってもらいたいとき、電話を

すれば喜んで相談に乗ってくれるという方がたくさんいればいるほど、村としては、自分たちだけでやるよりは、ずっといいわけで、そういう意味で、開かれた共同体づくりを目指しています。

## 5 網の目の関係による場づくり

結局、地域とは何かというと、いろいろな関係があって、その関係が網の目のようにつながっているのが地域であるわけです。そこには、人と人の関係もあれば、人と自然の関係もあれば、ご先祖さまを含めた過去との関係もあれば、これから未来をどうつくっていくかという意味で、未来との関係もあります。実に多様な関係があって、その関係こそが地域であり、その関係の中に他地域からも、一部分、関わってくれる人、その人たちもまた、地域の人である、と私たちは思っているわけです。

実は、私自身も村に1年中いたことはなくて、そのことが気になっていた時期があるのですが、あるとき村の人と話をしていると、私が1年中、村にいるか、いないかは別に気にしていないし、農業や林業を楽しんでやってくれる分には歓迎するけれども、農業や林業のリーダーになってもらうことなど全く期待していないと言われました。

そういうことよりも、私は仕事の関係で東京にいたり、全国を歩き回っていることも多いので、私が東京や地方で得てきた、村にとって必要な情報を届けようとか、村づくりにおいて他の地域ではこういうことをやっているとか、こういう成功、こういう失敗があったとか、そういった情報のほうが村にとって役に立つというのです。村の人間は、そういうことができないのだから、むしろ今のままの私でいいのだ、というわけです。

このことからわかるように、結局、村というのは、関係がつくっていく場であって、特に今のような時代には、昔以上にいろいろな関係が考えられるので、常に新しい関係をつくりながら、新しい場をつくっていくというのが、今後の村づくりの一つの方向性だと思います。

そういう意味で、都市は都市、村は村という時代は、すでに終わっていて、都市と村の間に新しい関係を結び直すというか、そのことによって、お互いに不足しているものを補い合う関係をつくるのが、これからの村づくりだと思います。

## 6 場の関係における信仰の意味

村においては、人と人の関係は、そういう意味で、これからもさまざまな関

係が形づくられていくと思います。ただ、村にいと、人と自然の係が持つは、かなり大きなものがあつて、特に山の神さまとか水の神さまといった村人の信仰、あるいは自然への願いとか思ひというものは、都市の人にはわからないかもしれませんが、村人にとって共通の大きな意味があります。

ちなみに、信仰という言葉は明治になつてからできた言葉で、本来、翻訳語です。村人たちにとっての信仰とは、阿弥陀さまへの願ひであつたり、お寺や神社への思ひであつて、近代的な意味での信仰というよりは、昔ながらの素朴な信仰です。そうした自然との関わりや伝統を背景とした信仰は、これからも村として大切にしていかなければならないと思います。

こういう信仰のあり方は、場の信仰と言つていいと思います。場の係の中に入つていくと、そういう信仰のあり方こそ妥当な信仰だというように、ごく自然に思えてくるのです。もともと日本の信仰というのは、実は、こういう形の信仰が中心であつたと思います。

近代以降、信仰が個人化して、信じる者は信じるし、信じない者は信じないという形に変わつてきたわけですが、私は個人が選択する信仰はいけないなどと思つているわけではありません。ただ、山の神、水の神といった、場における信仰は、個人の信仰を超越しているというか、人々の共有された願ひや思ひが込められていて、その役割や意義は非常に大きなものがあると思います。

上野村との係に一部入つてくる人たちが、それを村人たちと共有していけるかどうか。その共有のあり方をどうするかということが、今後の上野村の課題の一つだと思います。そういう意味で、外からの移住者たちとの、より開かれた共有係を、これから、どうつくつていくか。それが、今後の村づくりであるだけでなく社会づくりの大きな方向性ではないかと思つています。

#### パネルディスカッション

コーディネーター	草郷孝好（関西大学社会学部教授）
パネリスト	槇ひさ恵（NPO法人明るい社会づくり運動理事長）
	廣瀬稔也（NPO法人東アジア環境情報発伝所代表理事）
	内山 節

パネルディスカッションに先立つて、パネリストの槇ひさ恵、廣瀬稔也の両

氏から、それぞれNPO法人としての活動について報告が行われました。槇氏は、全国明社の活動として、ロシアのチェルノブイリ視察や東日本大震災の支援活動、また地域明社の活動として、新潟県阿賀野市や埼玉県富士見市での活動事例を紹介。廣瀬氏は、日本、中国、韓国の三カ国のCO2排出量、電力消費量、エネルギー別発電量、原発建設の実情などのデータを報告、日中韓におけるNPO活動や協力の実態、今後の方向性などを報告しました。

そのあと、草郷孝好氏の司会で、以下のようなパネルディスカッションが行われました。

草郷 それでは、これからパネルディスカッションに入りたいと思います。初めに、槇さんと廣瀬さんから、内山先生の基調講演を踏まえたうえで、ご発言いただきたいと思います。

槇 内山先生への質問なのですが、私たちは40年以上も明るい社会づくり運動を続けています。発足当時は強いリーダーシップをもった方々によって始められました。しかし、最近はトップダウンの形から平場のネットワークでの運動という形に変わってきています。こういうバックグラウンドをもったNPO運動を、内山先生のお立場から、どうぞ覧になるか、お伺いしたいと思います。

内山 地域のコミュニティというのは、一つの形に結集してやろうという形ではダメだと思います。むしろ、いろいろな形のコミュニティが集積している状態が望ましいと思うのです。そして、そのコミュニティ同士がネットワークをつくって協力し合う形が、いちばんいいと思います。私の村でもそうですが、いろいろなコミュニティが縦横無尽化したほうが力が出るからです。

廣瀬 私は、今春から浜松市の中山間地で暮らしているのですが、市役所が地元の人と相談もなしに、廃校となった中学校の跡地でメガソーラーを建築するという決定をしました。“平成の大合併”によって地域との関わりが疎遠になった自治体とどうつきあっていけばいいのか、内山先生のご意見をお伺いしたいと思います。

内山 今回の東日本大震災でもそうでしたが、平成の大合併で合併した市町村が動けなかったという問題がありました。今回の問題点は、市町村行政がお金の問題だけで動こうとして、住民自治とは全く関係がなかったという点です。ですから、住民が自治をできる範囲で、もう一回、市町村を分解させる試みが必要になってくると思います。

草郷 GNHは経済成長を否定しているわけではなく、その中身が大事なのですが、もっと大事なことは、住民自身が自分たちの活動によって行政のあり方に方向性を与えることです。

ところで、内山先生のお話の中で、上野村に外から入ってきた移住者が15パーセントいて、いずれ村の人口の半分になる見込みだというお話がありました。上野村のようになりたいと思っている村も多いはずですが、必ずしも、うまくいっていないとすると、その成功、失敗を分けているものは何なのか。逆に言うと、今は開かれていないけれど、いずれ上野村のように開かれた地域になりたいと思っている人たちへのヒントやアドバイスをいただければと思います。

内山 まず、歴史的な違いがあると思います。上野村には田んぼがありません。だから、昔から新しい技術とか外からの情報の重要性が認識されていて、外から来る人を拒否するような体質ではなかった、ということがあります。

田んぼ中心の村は、土地にしても農業用水にしても限られていますから、いわば定員が決まっている社会です。新しい技術も特に必要がないので、外から来る人を迷惑と感じる意識が昔から強かったと思うのです。

それから、外から入ってくる人が入りやすいようにする本気度の問題もあると思います。上野村では役場が対応していますが、戦後の市町村は国や県にぶら下がり、お金を回してもらえばいいという行政を続けてきてしまいました。その体質から抜け出せない体質が多く地域にまだ残っているのではないのでしょうか。

草郷 新しい共同体づくりには、内山先生が言われたような行政の役割も大きいと思いますが、榎さん、廣瀬さん、どう思われますか。

榎 内山先生の言われた本気度の違いは大事だと思います。そして、行政よりも住民側が本気を出さないといけないと思います。住民側が一定のスタンスをもって、ブレずに、やっていくことが必要です。それによって仲間を少しずつ増やしていくことも大事だと思います。

廣瀬 やはり、行政は住民の面倒をみてあげるというイメージが強いです。また、住民側にも行政に何かしてもらおうという感覚が強いのが実情ではないのでしょうか。自治体は住民の生活のためにあるはずで、本来、住民が自治体を主導するべきだと思います。



草郷 都市で新しい共同体をつくることは、今の日本を考えるうえで、とても大事だと思うのですが、これについて内山先生はどうお考えでしょうか。

内山 よく「コミュニティを都会にどうつくったらいいのでしょうか」と質問されることがあります。私は、ちょっと冷たい言い方ですが、「そういう質問をする人のもとにはコミュニティはありません」と答えることにしています。コミュニティは、それをつくろうとしている人のところにあるわけで、つくろうとした結果、壁にぶつかったり、失敗したりしたとしても、そこからコミュニティが始まっていくのだと思います。動き始めた人のところにこそコミュニティはできていくので、それは現に都市にもたくさんあると思うのです。

草郷 では、最後に、榎さん、廣瀬さんから、今日のご感想などを一言ずつ、ご発言いただきたいと思います。

榎 これまでは地域をベースとしたコミュニティが主だったと思いますが、社会を変えていきたいという志を縁（えにし）とする、いろいろなコミュニティがたくさんできてくるのが、多分、社会が強くなっていくために必要なことではないかと感じました。

廣瀬 やっぱり、頭で考えていた地域と、移住してみて関わった地域というのは違っているということを感じました。私が移住するきっかけの一つに内山先生の本を読んで、というところがあったので、今日は、大変、勉強になりました。

草郷 コミュニティづくりには多くの課題がありますが、内山先生がおっしゃったとおり、まず行動を起こすことから何かが生まれるので、それを、今後、わたしたちがどう育てていくのか。あるいは、これまで何もしなかった人たちが、どう動く仕組みをつくっていくのか。それが大事だということとともに、わたしたちの社会には、すでに実にいい試みや実践があるので、それを見直すこともできるし、それを頼りに新しいものをつくっていくこともできると思います。お互いに学び合いながら地域づくりの輪を広げていくことが大事だなと思いました。本日は、長時間、どうもありがとうございました。